

保育者の死生観を育む表現教育の実践的研究 2

音楽による表現

A Practical Study of Expression Teaching Building Views on Death and Life to Nursery School Personnel 2

Expression through music

安 氏 洋 子

Yoko Yasuji

1. はじめに

三年前より、「保育者の死生観を育む表現教育」をテーマに、保育・教育者養成校において音楽から死生観について考える試みを行っている。三年前の実践内容は、死と共通するイメージをもつ葬送行進曲を聴き、そこから汲み取ることのできる世界観から各々がいのちと向き合い、自分の考えを創作絵本により表現するという内容を試みた。音楽から得たイメージを自分なりに解釈し消化した上で、簡単に表せるものではなく、時間をかけ、創作絵本という別の表現に変換することで、死生観について深く向き合うことができ、いのちの尊さについて考えた学生が多くいたが、反面、クラシック音楽をあまり聴かない学生にとって、選曲したベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」が長過ぎるという課題も残った。そのためもう少し短い曲を選曲し、誰もが一度は耳にしたことのある曲にすることで、より音楽を身近なものとして感じられるのではないかと考えた。また表現手段についても自己の感情をダイレクトに表すことのできる音楽により表現することで、イメージをより直接的に表すことができるのではないかと考え、本研究では音楽による表現を用いることとした。

2. 本研究の目的

(1) 学生に育みたいもの

大学生に授業を行う中で常を感じることは、現在の学生は人とコミュニケーションを取ることや、相手の気持ちを想像するということが得意ではないようにみられることである。他の人と異なる意見を述べることや発言すること自体を恐れ、自分から発信することにあまり積極的ではない。授業内で質問のできる機会を設けても、他の学生の顔をうかがったり、挙手のタイミングをうかがう様子が見られる。また自分の考えがあったとしても、それを言葉にすることを苦手とする学生も多い。

音楽は言葉では伝えきれない感情や意志を蓄えている。音から伝わる感情を自分の言葉で表したり、別の表現に変換することは、人の気持ちに寄り添い、気持ちを読み取ることにもつながるのではないかと考える。本研究は言葉のない音楽を聴くことで、音楽の中にある感情や見えないものを感じ取る力を育み、それを再び自分の音楽として表現することで死生観と深く向き合うことを目的とした実践的研究の第二弾である。

(2) 2つの課題

安氏 (2012)¹ では、ベートーヴェンの生へのエネルギーに満ちている力強い曲を選曲し、学生に死から生への循環を意識させることを目的としたが、クラシックを聴きなれない学生にとって約一時間ほどかかるそ

の曲は長すぎるという課題が残った。クラシック音楽を普段耳にしない学生に、音楽から情景や曲に込められた意図を汲み取るという作業は難しいものであったようだが、学生の感想からは、その曲に自分を重ね、描かれている世界を読み取ろうとしながら感じる学生もいたことがわかった。

そのため今回はもう少し短く、様々な場面で誰もが一度耳にしたことのあるショパンのピアノソナタ第2番（第3楽章「葬送行進曲」）を選曲し、より身近な音楽を用いて表現する内容にすることとした。

またもう一つの課題は、学生と芸術との距離についてである。その距離感を広げているのは、実は教員側なのではないかと考えるようになった。実技系教員としての芸術観と自信こそが、保育・教育者を養成する上で、学生と芸術との距離を広げている可能性があるのではないだろうか。またピアノ実技のスキルアップに固執するあまり、学生に音楽の素晴らしさ・ピアノを弾くことの楽しさ・声の持つ美しさなど音楽を通じた感性の揺さぶりと心を育むことが不十分ではなかっただろうか。芸術とは、本来もっと身近にあるべきものである。

このような内容を前提に、本研究では音楽という芸術をどこまで学生に近づけることができるのかという課題も含め実践を行った。

(3) 私たちの問題意識

「保育園には、園児の頃からのいのちの大切さ、尊さに触れ、将来的に子育てに前向きな気持ちを持てるように伝えていく役割がある²。」と保育者である千田は述べる。千田は子育て支援活動を通して、「小さい時から、子どもの可愛らしさや大切さ、いのちの尊さを肌で感じる体験は、将来、愛しみの気持ちを持っていのちを繋ぎ、子育てをする心を育てていけると確信する。愛しみの心で触れられ、育てられた子ども達が、自分の心に育った涵養性を次の世代に伝承してゆくもの」と考え、それは保育園の社会的役割と意義だと述べている。このような心を育むことは、人が人として生まれ、成長していく上で必要なことであると筆者は考える。

このような心を幼児期から育むためには、千田も述べるように、保育・教育者が大きな役割を担うと言え

るだろう。保育・教育者自身が「いのち」に関してしっかり向き合い、深く認識しておかなければならない。そのためには、保育・教育者を目指す学生を育てる養成校において、いのちと向き合い考えを深める経験が大切であるといえる。

3. 葬送行進曲の特徴

安氏(2012)では、数多く存在する「葬送行進曲」について、作曲家の特別な想いと感情がダイレクトに表現されていること、また「葬送」をテーマにした曲は、作曲家は異なるものの、そこには共通する世界観が存在するのではないかと述べたが、その共通概念がどのようなものであるのかについては、答えを導き出すことができなかった。そこでその根拠を探るべく、前回選曲したベートーヴェンや、今回選曲したショパンの作品が含まれる、1750年から1850年までに作曲された代表的な「葬送行進曲」をピックアップし、その特徴と共通概念を分析した。そこで得ることのできた結果を以下に示す³。

(1) リズム

ほとんどの曲に共通して、付点のリズムが認められた。西洋音楽では、付点のリズムを用いることで、「悲しみにうなだれ重い足を引きずりながら進む葬列の歩み」を表したものとされている。またほとんどの曲のバスに「ドラムロール」が入るという特徴がみられる。

(2) テンポ

各楽曲の拍子は2拍子、あるいは4拍子である。速度表示はほとんどの曲のテンポがLargo(幅広く、ゆったりと)やLento(遅く)、Adagio(ゆるやかに)などのゆっくりとしたテンポで奏するという指示がみられる。

(3) 調性

短調

葬送行進曲は全ての曲が「短調」である。

変種調

ほとんどの曲が変種調(フラット系)の短調である。当時、「明るい」「楽しい」「硬い」という性格は長調

と嬰種調（シャープ系）の調に、「暗い」「悲しい」「柔かい」という性格は短調と変種調の調に結び付けられた。

短調から長調への転調

ほとんどの曲が暗い短調で始まり、途中で長調に転調し、再び短調に戻る形式が使用される場合が多い。「死」に対するイメージは、それぞれの作曲家が信仰していたキリスト教の考え方に拠るものではないかと考える。キリスト教による死の考え方が作曲家たちの根底にあったことから、短調で厳粛なリズムを用いて開始されながらも、途中から天国的ともいえる長調の響きに転調させることで、「死を受け入れる」という意味を表す技法として取り入れたのではないだろうか。

(4) 追悼者

葬送行進曲は故人を偲ぶ想いから作曲された追悼の意味だけではなく、フランス革命期の葬送行進曲は、祖国を想う気持ちや政治的連帯、または民衆を団結させアイデンティティ意識を鼓舞する目的を果たした。故人を追悼する葬送音楽ではなく、民族、歴史、革命に参与する時代精神の表現であると解釈できる曲もある。

上記に挙げた特徴を、筆者は「葬送行進曲」の共通概念として導き出した。

(5) ショパン：ピアノソナタ第2番第3楽章「葬送行進曲」の特徴

本研究で選曲した葬送行進曲の特徴について示す。

このピアノソナタは4楽章から構成されているが、第3楽章の「葬送行進曲」は1837年に単独で作曲され、この曲を創作の着想として企画されたものと考えられている。

葬送行進曲の冒頭の上下に動く和音の連続反復は、葬式の行列がまさに動き出そうとするときに、打ち鳴らされる吊鐘の音を模したものであると考えられている。またその和音の上に、葬送行進曲独特の足を引きずるような付点リズムが現れる。そして第19小節以下に低音に現れる2回のトリルは、ティンパニではないだろうか。だとすれば、この曲にも葬送行進曲の特徴である、ドラムロールが認められることになる。この

葬送行進曲は、実際にショパン自身の葬式において、オーケストラ編曲されモーツァルトの『レクイエム』と共に演奏された⁴。

変口短調で始まる付点リズムの行進曲は、中間部では平行調である変ニ長調に転調し、冒頭の重苦しい沈鬱な和音で心を打ち砕かれた者に、静けさと慰めをもたらす、天上からの旋律のようである。

【第3楽章の形式】

- ・ 作曲年代 1837年
- ・ 調性 変口短調→トリオで変ニ長調へ転調
- ・ 拍子 4/4
- ・ 発想記号 Marche funebre
- ・ 追悼者／献呈者 特になし

【第3楽章冒頭】（変口短調）



【中間部】（変ニ長調に転調）



(Breitkopf und Härtel, n.d. [1878]. Plate C. VIII. 1)

以上の特徴から、この曲はショパン自身が葬送行進曲と名付けてはいないものの、葬送行進曲の特徴を確実にとらえているといえる。

4. 研究の方法

誕生したばかりの新しいいのちと触れ合う保育・教育者こそ、いのちの重みを知り、大切にいのちを育てていく必要がある。死と向き合い、死があるからこそ生に繋がる喜びや、いのちの大切さを育む時間が必要である。保育・教育者に求められる死生観を、「音楽表現」を通して育むことを試みた。

本研究は、2011年度後期に開講された「実践音楽表現法」の中で行った。受講者数は1演習クラス約40名で、全5回の授業内容を3つの演習クラスにて行った。

まずショパンのピアノソナタ第2番を、曲名は伝えず全楽章を聴いてもらい、その中の何楽章が「葬送行

進曲」であるのか、また各楽章について、各々が感じたイメージを記してもらった。その後、第3楽章が葬送行進曲であることを伝え、葬送行進曲の特徴を解説し、次に曲名と作曲者、作曲の背景や曲の意図について説明を行った。

保育・教育者が死生観について考えることの必要性を話し、各々の死生観についてグループに分かれ検討し、その考えを共有した。

死について考えることで自分と向き合い、自分たちはどう生きていきたいのか、どんな死をむかえたいのか自由討論してもらった。そこから導きだした考えに基づき、その想いにメロディーをつけ、各クラスでオリジナル曲を創作し、その曲をクラス全員で合奏により表現するという実践を試みた。

5. 結果ならびに考察

保育・教育現場では、編曲や合奏用のスコア作成を求められる機会があるため、各クラスで創作した曲を、合奏曲として演奏できるようスコアを作成した。中には作曲だけでなく、メッセージがよりダイレクトに伝わるよう、歌詞を考え合唱曲を作曲したグループもあった。創作した合唱・合奏曲は、グループごとに様々なテーマがあり、家族・友人への感謝や、いのちの誕生について、明日や未来に向けてのメッセージ、また東日本大震災の被災者の方への応援ソングなどもあった。それぞれが死に向き合い、いのちの重みと生の喜びが作品となり表現された。

(1) 鑑賞の実態

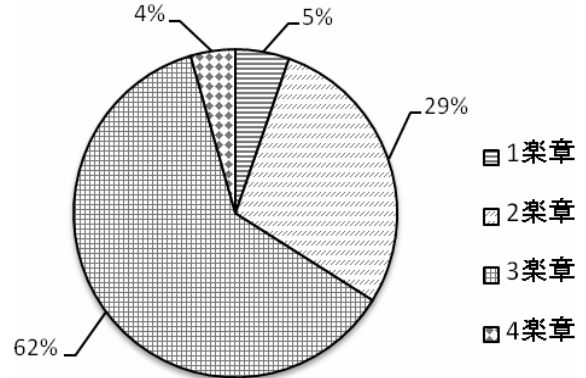
課題にも挙げた通り、今回は比較的短い曲で、誰もが一度は耳にしたことのあるはずのショパンのピアノソナタ第2番を選曲した。この第3楽章「葬送行進曲」はマスメディアでも採り上げられる機会が多く、ドラマや映画の中の暗い場面や、ゲームではゲームオーバーを表す場面などで使用されたこともある。とても有名であるため周知の曲であると想定し選曲したが、聴いたことがないという学生が大半を占めた。クラシック音楽が学生の日常生活に全く根付いていないことを知る機会となった。

しかし耳にしたことがないのであれば、既成概念に

囚われることなく、自分の感じたままに聴くことができるため、今回行ったアンケート結果の信頼性は高いといえる。

どの楽章が葬送行進曲であるか知らないにも関わらず、学生の半数以上が第3楽章を葬送行進曲であると回答することができた。

【学生が葬送行進曲と感じた楽章】



【第3楽章を葬送行進曲と感じた学生数】

・ I クラス	・ 23 / 36 人	約 64%
・ II クラス	・ 27 / 43 人	約 63%
・ III クラス	・ 23 / 38 人	約 61%
全クラス合計	・ 73 / 117 人	約 62%

この結果からも、時代や国は異なれども、「葬送行進曲」には作曲家の特別な想いが表れていると考えられる。作曲家が思い描き、音に託したその想いが、時代を越え作品を通し、当時を知らない現代の私たちの心に響き、「葬送行進曲である」とか、悲痛な想いというものを説明されずとも汲み取ることができ、クラシックに馴染みのない学生にも受け止めることができているのではないかと考えた。

葬送行進曲の特徴として、学生が曲から感じ取ったイメージを以下に示す。

【付点リズム】

- ・ 重い足を引きずるような感じに聴こえる。
- ・ 一定のリズム、参列、行進のイメージ。
- ・ 悲しみに包まれている。
- ・ 象が歩いているような感じ。

【転調部分】

冒頭部分：変口短調 中間部分：変二長調

- ・孤独の中でも希望の光が差し込んだり、迷ったりしているイメージ。
- ・悲しみに包まれた心を癒すような雰囲気。その中にも悲しみがあり、まるで走馬灯のような感じ。
- ・天国に行くような、幸せの世界に旅立つような感じ。
- ・春のイメージで息を吹き返すようなイメージ = 芽吹く。
- ・悲しみを乗り越え未来へと向かい、大切な人を天国へと送り出す感じ。
- ・優しさや柔らかさを感じ、なぜかお母さんのことを思い出した。
- ・葬る、見送ることから、死への恐怖、でも死後天国へと安らぎへ向かうような、2つの真逆の要素が含まれているように感じる。

このように、短調から長調への転調部分に『悲しみを乗り越える』、『天国や希望』、『祈り』、『いのちの誕生』、『感謝』、『絆』といった前向きなイメージを持つ意見が多くみられた。またそのイメージを『生きること』へと結びつけ、生へのメッセージを込めた作曲活動へ繋がったと考えられる。

(2) 学生の学びからの考察

作曲をすることで変化した死生観について、学生から以下のような意見が挙げられた。

「逆説的かもしれないが、『死』について考え、作曲しているのに、自分が今生きているということを強く実感した。」

「考え次第で『死』があるからこそ、どう『生』きていくべきなのかというふうに考えられるのだと感じた。他クラスの発表を聴き、素直に自分の気持ちを伝えることも大切なのだと思った。」

「人間はいつ死ぬのか分からない。だから伝えるべきことはしっかりその時に伝えないといけないと感じたので、これからはもっと感謝の言葉を伝えられるようにしたい。」

「新しい生命に着眼し曲を作ったが、他の班では友達ということ意識したりしていたので、『生』と言っても一言で言い表せるものではないことがわかった。」というような気付きが挙げられた。

葬送行進曲を聴き、自分の死や身近な人あるいは動

植物の死を想い、今自分のおかれている状況や時代と比較しながら、いのちの有限性や生への執着が芽生え、よりよく生きたい、そして人生を豊かなものにしたいという意見が出た。また同時に、「伝えること」の大切さまでも気付くことができていた。

次に作曲を終えての感想を挙げる。

「一つの曲にあらわしたことで、気持ちを皆と共有できたり、一緒にうたうことで一つになれたと感じることが出来ることを知り、この気持ちは誰かに訴えるものがあると感じた。」

「皆で歌、ピアノ、ハンドベルなどを合わせて音を綺麗に奏でることができた時、とても嬉しい気持ちになった。早く皆にこの歌を聴かせたいと感じた。」

「歌っていくうちにポンポンとメロディが浮かんできて、とても楽しく活動することができた。この曲はクラスにとって大事な一曲となると思う。」

「心の中でおもっていることを、外に出すことは、簡単ではないことが分かった。そして楽しいと思った。皆が伝えたいことを本当に誰かに伝えたい。歌は大好きだが、より好きになった。」

「音にのせると、ただの言葉もたくさんの人に伝わっていくし、心にひびくものになると思った。」

音楽を表現することの喜びは、自分の気持ちや感情を直接音に表現できることにある。音楽は人と人を繋げ、音楽により一体感を味わい、絆を深めることができるのである⁵。この学生の感想からは、作曲活動の過程において、音を奏でる喜びを自分自身で見出し、またアウトプットすることの大切さを感じることができたといえるだろう。

また「曲に歌詞をのせることで伝えたいことを素直に表現できるのだと感じ、作曲することが楽しいなと感じた。」

「作曲活動をすることで、さらにグループの結束ができ、音楽を共有できると感じた。」

「作詞作曲は、相手に伝えたいことを素直にそのまま書くことも大切なのかなと感じた。」

「作曲は難しいと考えていたが、意外とできるのだと思った。」

「音楽の構成について学ぶと改めて作曲家の偉大さを感じた。作曲をすることで、音楽を少し身近に感じる

ことができた。」

上記に挙げたように『作曲活動を通して、音楽をより身近に感じることができた』という意見は、安氏(2012)で課題となった「実技系教員が芸術のハードルを上げてしまう」という課題を解消することに繋がったのではないかと考える。クラシック音楽を聴かない学生も、音楽メディアの急激な普及により、車や電車での移動中も常に音楽を耳にしている。その状態が良くも悪くも、音楽を好きという気持ちがあることに変わりはない。学生にとり常に傍にある音楽で表現することにより、音楽という芸術を学生に近づけ、身近なものとして感じることでできる機会となったといえるだろう。

作曲や音楽表現活動に前向きな感想が挙げられた一方で、「イメージは頭に浮かんでいても、音に出そうとするとイメージ通りにはいかない。」

「皆で一曲を作ったため、なかなか皆の意見が合わずにまとまらない。」

「どうしても既存の曲に引きずられてしまい、オリジ

ナル曲を作ることは難しい。」

というような作曲の難しさや、グループでの活動の難しさについての意見も挙げられた。頭で考えたことを文章に表すことを不得手とする学生もいる中で、その想いを曲で表現するということは、学生にとり難しさを感じる内容であったかもしれない。そのため一人での活動ではなく、皆と相談し合える環境をつくり、音を楽譜に起こすことが得意な学生が記譜を行えるようグループ活動としたが、それは死生観の意見がなかなかまとまらないという結果にも繋がった。

この点については今後の課題とし、もう少し簡単な構造で、短い形式の作曲にするなど工夫が必要である。

また曲を作る目的から、暗いままでなく明るい雰囲気にしたいと話し合い、「生」に焦点を当てたいと考えるようになったグループがあり、音楽というかたちで表すことにより、「死」が悲しみだけではなく、「生」の方向へ考えを転換できる可能性があるのではないかと考えた。

そして葬送行進曲の特徴である、短調から長調への

【投票により選ばれた曲】

■明日に向かって■



東日本大震災の被災者を思い考えた曲。震災の方はもちろん、世界中の人々が前向きで元気になってもらいたいという思いがある。つらい時や苦しい時にこの曲を聴いて、あせらずゆっくりと諦めないで突き進んでほしい。タイトル通り、明日に向かってはばたいていき、希望を持ち、諦めない心を忘れないでほしいと思い明るい曲調にした。

■ぼくのおとうと■

「くまの子どもが生まれる」ということから生と死の『生』を表現した。幼児向けとして作り、歌詞を覚えやすく可愛く作詞した。イントロはお母さんのおなかの変化を不思議に思いながら見守る。サビはお兄ちゃんになるという自覚が芽生え、弟の誕生を楽しみに待っている。全体として、新しいいのちが生まれることの素晴らしさや家族の喜びをイメージとしてメッセージに込めている。

■大切な君へ■

東日本大震災後、何気ない毎日が幸せだったことを改めて考えることができた。その中でクラスの仲間や友達との繋がりがや大切さに気づき、その想いを言葉にし、曲にした。たくさんの友達に支えられていることに気付かず、それが当たり前になっていたが、決して当たり前ではなく、言葉に表すことができないくらい、感謝しなければならないことを、素直に「ありがとう」や「ごめんね」を言える自分になりたい。

転調部分に『生きること』への喜びを見出し、そのメッセージを作曲という形で変換することにより、自分の生き方にも結び付けて考えることができていた。

また前述したように作曲を通して、自分の想いを伝えていくこと、そして表現したものを誰かに聴いてほしい、皆に伝えたいという想いが強くなった学生が多くいた。このことから、コミュニケーションをとることを苦手とする学生たちも、音楽を介してその想いを伝えること、表現することが素直にできたように思う。また表現したものを「伝えたい」と自ら強く思うことができたということは、本研究の目的で「学生に育みたいもの」としていた『発信すること』という課題に到達することができたのではないかと考える。

死生観を深めることを目的とし、その手段として音楽を用いたが、感想からは作曲を通し音楽を表現する根源的な喜びと感動を、学生一人ひとりが味わい、同時に「伝えること」の大切さまでも気付くことができていた。

「伝えること」とはコミュニケートすることであると筆者は考える。他の人と一緒に音楽を奏でること、音楽のもつ訴える力、伝えていくことの大切さ、また表現することの喜びを音楽から学び深めることができた。最初は作曲と聞くと難しいイメージを持つ学生もいたが、実際に行うことで感情と音楽が密接に関連していることに気付き、音楽をより身近に感じるができる経験となった。

グループ内の意見がまとまらないという意見もあったが、一方で他の学生の考え方に触れることで、死が恐怖だけのものから別の見方ができるようになり、死について様々な視点でとらえられるようになったこと、そして死について向き合い深めた上で、別の音楽として表現することにより、いのちの尊さや生の重みを考えることができたのではないかと思う。

6. 終わりに

いのちについてグループで話し合う時間を多くとった。その中で出てきた意見の一つに、「自分はいつ死んでもいいし、死ぬことは怖くない。」という意見があった。それは人生に疲れ悲観して出た発言ではなく、逆に全てやり尽くした気がするのもう悔いはないと

いうものだった。大学2年生といえば、弱冠19、20歳であるにも関わらず全てを経験したと話している姿は、確かに悔いてはいないようであったが、人生における未経験の出来事や感情が多く待ち受けていることを知る必要があると感じた。しかしこちらから意見を押し付けず話し合いを見守っていたところ、別のグループでは身内を亡くして間もない学生が、話し合いの内容から涙を流す姿がみられた。本人に授業内容の趣旨を伝え、耐えられないようであれば自分の考えは述べず、意見を聞くだけでもよいことを伝えたと、本人から「辛いけれど大切なことなので、自分も意見を述べたい」という答えがあり、その後グループの話し合いをリードしていくようになった。無理をしないよう配慮しながらその姿を見守った。その学生の意見は「死は誰にも避けられないこと。そして落ち込む家族の姿をみて、自分がしっかりしなければと思うようになった。身近な人の死を経験することで、家族を支えていきたいと思い、自分が強くなれた。」という意見が挙げられた。

また他のグループからは「『暑くて死にそう』とか、『きつくて死にそう』、などと軽々しく使ってしまうことに気が付いた。」という意見もあった。「死にそう」という表現は、自分の気持ちを表す最上級の表現として簡単に例えてしまうものの一つである。しかしその言葉の選択が本当に適切であるのか、また言葉のもつ重みについても、死生観について考えることにより学びが深まる機会となった。

そのような気付きや意見をクラスごとにまとめ発表したことで、最初に紹介した、いつ死んでも後悔はないと話していた学生が、皆の意見を聞くことにより、「皆は死にたくないとか、死ぬのは嫌と思っていることが分かり、自分はあまり生きることに執着がないし、このままでいいのかと思うようになった。」と意見が変化していた。まだ明確な生の肯定とまではいかないが、少なくともいのちについて、そして今後の生き方について考える契機となったに違いない。

高内は「『死』について学ぶことは、どのように『生きるか』を学ぶことにつながり、さらには『いのちの大切さ』を学ぶことにつながるのである⁶⁾。」とし、日本人の『死』に関する話題をタブー視する傾向について危惧している。学生の感想からも最初は「死

について恐怖しかないので考えないようにしている。」という意見も挙げられたが、死は誰にとっても避けられないものであり、平等に訪れるものである。みたくないものに蓋をするのではなく、乳幼児期から死に触れる経験が必要なのではないかと考える。

近代化が進みデジタル化された現代では、子ども達が以前には想像もできなかったような発言や行動を行うようになった、とある保育者から話を伺った。死んで動かなくなった動物の身体を探り、電池交換をしようとしていたとのことだった。電池を交換すれば再び心臓が動きだすと子どもに思わせてしまった責任は、現代社会にある。動かなくなったおもちゃや作動しないリモコンも、電池を交換すれば元通りに使用できる。ゲームの中で一度死んでしまったキャラクターも、リセットさえすればいつでも復活できる。しかし人間のいのちはそうはいかない。一度終わったいのちを再生させることは不可能である。人のいのちはリセットができないこと、そしていのちあるもの全てが代わりのきかないかけがえのない存在であることを、乳幼児期からきちんと伝えていく必要があると考える。なぜなら乳幼児期からの感覚や生活体験が、その後の生き方や考え方を決める重要な指標と成り得るからだ。

人生の楽しさや充実感を含め、生きていくことの意味を伝える役目は私たち教員にもあると考える。そして子ども達にそれを伝えていくことができる存在は、周りの大人であり、保育・教育者であろう。今から様々な出来事が待ち受けている人生に、希望や期待が持て

るよう導く必要があるだろう。良いことだけではなく、辛いことから目をそらさない心構えと覚悟を、子どもだけではなく、その子ども達を将来育てていく存在となる養成校の学生たちにも、実感を伴うよう伝えていく必要がある。そして一人ひとりが死生観を育むことで、子どもといのちの出会い方について模索してほしいと考える。

付記

本研究の一部は、2013年日本保育学会第66回大会でポスター発表している。

引用文献

- 1 安氏洋子(2012)「保育者の死生観を育む表現教育の実践的研究 音楽から始める創作絵本づくり」『福岡女学院大学紀要人間関係学部』第13号、pp.9-16。
- 2 千田恵理・咲間まり子・畠山慶子・佐々木雅子(2013)「いのちをつなぐ地域コミュニティ - 子育て支援活動を通して 1」『日本保育学会第66回大会発表要旨集』PD-116、p.956。
- 3 安氏洋子(2013)「葬送行進曲における共通概念」『日本ピアノ教育連盟紀要』第29号、pp.87-112を参照しまとめたもの。
- 4 属啓成(1989)『ショパン作品篇』音楽之友社、p.243参照。アーサー・ヘドレイ編(2003)『ショパンの手紙』小松雄一郎訳、白水社、p.507参照。
- 5 太田光洋編(2013)『乳幼児期から学童期への発達と教育』保育出版会、p.144。
- 6 高内正子編(2008)『子どものこころとからだを育てる保育内容「健康」』保育出版社、p.158。